



Mountain Victory-WeddelとVatchの反目の行方

著者	谷口 義朗
雑誌名	英米文學英語學論集
巻	3
ページ	11-20
発行年	2014-03-20
その他のタイトル	Antagonism between Weddel and Vatch: Faulkner's "Mountain Victory"
URL	http://hdl.handle.net/10112/8391

“Mountain Victory” —— Weddel と Vatch の反目の行方

谷口義朗

William Faulkner の “Mountain Victory” (1932) については従来「フォークナーが南北戦争について書いたもののなかで最高のものだ」(Howe 264) というような高い評価があった。また Howe 以前にも Malcolm Cowley がフォークナーの『短編集』(Collected Stories, 1950) 編纂に際してこの作品に言及している(梅垣 49)。フォークナーは『短編集』を計画した際にそこに収めるつもり短編を六つのグループに分け、それぞれのグループにタイトルをつけて章分けしたのだが、カウリーは彼から助言を求められて、フォークナー自身が企図していた六つの章⁽¹⁾の配列を変えること、すなわち最後の二つの順序を入れ替えることを提案した。そうすると “Mountain Victory” を含む “THE MIDDLE GROUND” の作品群が最後に来ることになり、この短編集の全体的なテーマということを考えればそれの方が望ましいというのがその理由であった。カウリーは作家自身が最後に持ってこようとした “BEYOND” というタイトルのもとに収められた初期作品群が気に入らず、むしろ削除した方がよいとさえ考えていたのである。さらにそのように入れ替えれば “THE MIDDLE GROUND” の最後におかれた “Mountain Victory” が短編集全体を締めくくることになる。カウリーは「これはいい作品だし」、そうすることによって、この短編集に入る予定のいくつかの「南北戦争の物語と同時に族長の物語(インディアン)の物語)に有終の美を添えることにもなる」とつけ加えた。“Mountain Victory” は南北戦争を扱っていると同時にインディアンに関わる物語でもある。) 要するにカウリーは、“Mountain Victory” がこの短編集の掉尾を飾るのにふさわしい作品だと考えたのである(Cowley 119-20)。

それから少し時代が下って、James Ferguson は、フォークナーの短編小説を総体的に論じた数少ない研究書のうちの一冊で、長編小説の場合と比較してフォークナーの短編作品について書かれた論文が驚くほど少ないこと、そのうえまた彼の最も出来のいい短編作品のいくつかが大方の批評家によって無視されてきたことを指摘し、その一つの例として “Mountain Victory” をあげている(Ferguson 1)。しかしそういう Ferguson も、この書物においてはその性格上⁽²⁾仕方がないにせよ、それ以外においても “Mountain Victory” を一個の作品として詳しく論じているわけではない。“Mountain Victory” の批評・評価をめぐるこうした状況、すなわち一方では高い評価を受けながら、一個の文学作品として詳細な分析・評価をうけることがあまりないという状況は、Hans H. Skei が下のような言葉で要約している。ちなみに Skei も彼が選んだフォークナーの最も優れた十二の短編にこの作品を入れて高く評価している。

“Mountain Victory” has until recently been given only cursory treatment by scholars and critics, but even those who claim that it has been ignored seem to do little to improve our understanding of this magnificent story. (Skei 1999, 110)

そして Skei は続けて、この “Mountain Victory” はほとんどのフォークナーの短編作品より自律的な (autonomous) 作品であるので——つまり他のテキストとあまり関連性がないので——独立した一個の文学作品として確実に “more extended treatment” に値するということを行っている。(Skei 1999, 110)

さて *A Reader's Guide to the Short Stories of William Faulkner* の著者 Diane Brown Jones によれ

ば、“Mountain Victory”の批評は、大体のところ、作者フォークナーが「南部神話、南北戦争、人種間の緊張、個人の危機（といった問題）をどのように扱っているかという点をめぐって展開している」（Jones 523-24）。これらの問題に貧困、家族間の関係の有り様といったことをつけ加えることができるだろう。この作品の問題点はこれではほ出そろったと言ってよいと思われる。

しかしこの作品の筋を動かしているのは二人の主要登場人物の緩和しがたい反目である。あるいは、ハウの言葉によるなら、異なる二つの「生活様式の衝突」（Howe 264）である。二人の人物の反目には、南北戦争で敵同士であったということだけではなく、上述のように人種間の緊張関係、生活レベルの差といった要素がからんでいて、とくに山小屋の住人ヴァッチ（Vatch）の訪問者ウェデル（Weddel）に対する敵意をより激しいものにしてている。小論ではこの二人の人物の反目、二つの生活様式の衝突が、いかにさげがたく悲劇的な結末に向かって突き進んでいくか、その道筋をたどってみることにしたい。

この作品は時間的には四月のある日の午後から翌日の早朝までというようにごく限られており、舞台はテネシー州東部のアパラチア山系の山中にある山小屋とそこごく近辺におかれている。また登場人物はその山小屋に住む家族五人と、そこに一夜の宿を乞う、戦い（南北戦争）に敗れて故郷のミシシッピ州に帰る元南軍の将校とその従者の黒人だけで、物語の筋は時間の流れに沿ってまっすぐに進んでいる。以下ではそうした物語の流れに沿って、セクションを前から順にたどっていくことにする。

馬に乗った二人の男が自分たちの家の方に向かってぬかるんだ坂道を登ってくるのを、その家に住む五人の住人が窓から見ている。このように物語は窓からのぞく住人たちに視点を置いて幕を開ける。男たちは門の所で止まり、まずそのうちの一人が馬から降りて手綱を引き、歩いてやってくる。その家というより小屋（cabin）の窓辺に立つ三人の男のうちの一人が窓辺から離れ、ライフル銃を手にして戻ってくる。こちらに向かってくる男たちの一人が反乱軍＝旧南部連合軍の外套を着ているのだ。「あいつらは降伏したんだ。負けたと認めたんだ」⁽³⁾と言って年長の男（一家の父親）がライフル銃を手にした年若の男（長男ヴァッチ）をたしなめる。その小屋は、テネシー州の山中にあり、そのまわりにほかの家は見あたらないようである。南北戦争当時、テネシー州は南部連合軍（the Confederacy）に加わっていたが、おそらく作品の舞台に設定されているテネシー州東部の山間部には北軍の同調者ないし北軍に加わって戦った人たちも実際に（史実として）多くいて（Towner and Carothers 395）、作品中の小屋の住人たちも北軍に同調し、長男が北軍兵士として戦争に加わったのである。

しかし父親は上で引用した言葉からわかるように理性的にふるまい、よそ者に対する警戒心は当然示しつつも、一夜の宿を乞う二人の旧南軍兵士を受け入れる。二人はソーシェイ・ウェデル（Soshay Weddel）という元南軍の少佐とその従者のジュバル（Jubal）という黒人男である。ウェデルはフランス人の血を引くチョクトー族の若者で、ミシシッピ州にコンタルメゾン（Contalmaison）という、族長であった父親から相続した大きなプランテーションを所有しており、ジュバルはそこで主人の一家に仕える黒人奴隷で、馬の世話をするのがその主たる仕事であった。ウェデルが戦争に出る際に、彼の身の回りの世話をするようにとウェデルの母親に命じられ、主人に付き従ったのである。

“Mountain Victory”は十一のセクションに分けられているが、第一章は上で述べたように父親がウェデルたちを受け入れ、ジュバルが馬を納屋に引いていくところで終わる。そしてこの開幕の場面における両者、すなわちウェデル一行と山小屋の一家の出会い（とくにヴァッチの側における）強い敵意をはらんで緊張感を生み出し、それは最後の結末に至るまで持続して物語全体を張りつめたトーンで満たしている。また第一章では、すべて一家の主人に指示を求める、消え入りそうな様子の母親が何気なく描写されているが、そこにのちのち如実に示されることになる、

この山小屋の家族の支配・被支配の関係が暗示されている。

第二章では、その小屋の娘が、小屋本体にさしかけて造った台所において（というよりよそ者がやってくるのを見た父親にそこに追いやられたのだが）、丸太の間に詰めた土が割れ落ちた隙間から母屋の部屋をのぞき込んでいる。そこでの父および兄とウェデルのやり取りを興味津津うかがっているのだ。シェイは「フォークナーは完全に視点を替える必要が生じたとき、物語をセクションに分割したように思える」（Skei 112）と言うが、第一章では小屋の窓から外を眺める小屋の住人たちの視点から話が語られていたのに対して、母屋の部屋を見るための視線が必要になった時、物語は第二セクションに移り、台所の壁の隙間から母屋をのぞく娘の視線が採用されたのである。もちろん娘が独白的に語るわけではないが、語り手の視線は娘のそれに重ねられている、あるいはそれに寄り添っている。

娘は二十歳くらいで素足のまま、粉袋を縫い合わせた服をただ一枚着たきりである。彼女の意識は、壁の隙間から母屋の部屋をのぞきながら、まだ姿は見えないものそこにいるはずのウェデルに引きつけられ、自分の名を名乗るソーシェイ・ウェデルの声が聞こえると、彼女は「ソーシェイ・ウェデル」と、うっとりとした口調でその名を吐き出す（749）。履く靴さえないという極度の貧困と、後に明らかになるように父と兄に暴力的に支配される状況から脱出したいという願望を彼女は無意識のうちにすでにこのウェデルに投影しているのだ。だから壁の隙間からのぞく娘の目にその全身を現したウェデルは、「汚れ、つぎがあたり、何度もブラシをかけて擦り切れたントをはおり」、「顔は疲れ、ほとんどやつれていた」けれども、「この地上の空気とはまた違った空気を吸い、その身体にはまた違った血が温かく流れている、別の世界からやって来た人物のように見え」（749）るのである。娘がウェデルに投げかける願望はこの物語の筋にのちのち関わってくることになる。

長男のヴァッチはテーブルに向かって座り、弾薬筒（cartridge）をこれ見よがしにいじりながらウェデルに対して脅迫的な言葉を吐く。北軍の兵士として戦い、戦争には勝ったものの何度も恐怖を味わわされた仇敵の元南軍将校ウェデルに対する憎しみであるが、ウェデルに対するヴァッチの敵意に満ちたふるまいにはさらに別の要因が加わっている。ウェデルはヴァッチからウィスキーをすすめられ、胃が悪いから自分は飲めないがジュバルに飲ましてやりたいと納屋にいるジュバルにそれを持っていこうとする。その時、彼は出口を間違えて台所のドアの方へ向かうが、ヴァッチは「そっちじゃねえ」と言い、そのドアの前に立ちどまったままのウェデルに向かって「ドアから離れろ。この黒んぼが（You damn nigra）」（751）と叫ぶ。ウェデルは黒人の血は引いていないが、「浅黒い顔に黒い目、黒い髪（a dark face, with dark eyes and black hair）」（747）をしており、ヴァッチは彼を黒人あるいは少なくとも黒人の血が入っていると考えているのである。そしてこの侮蔑的なことば（'damn nigra'）が発されたのが、ウェデルが娘のいる台所に入ろうとした時だったということに意味を読み取ることは可能であろう。つまり娘はウェデルと顔を合わさぬように母屋の部屋から台所に移されていたのであり、女性の性が脅かされそうな（可能性はある）ときに人種に対する差別意識は一気にその姿を現わさずにはいないということである。

「この黒んぼが」と罵倒された時、ウェデルは「そうか、気に入らないのはおれの顔なんだな、軍服じゃなくて。……しかしあんたらはおれたちを解放するために四年間戦ったんじゃないのか」（751）とヴァッチの本音を捉えてやりかえす。すでに述べたようにウェデルは黒人ではないが、自分は黒人ではないとヴァッチの言葉を否定することはせずそのまま受け入れて、戦争の大義とはうらはらに抜きがたく存在しつづけるヴァッチの差別感情を鋭く突いているわけだ。「正面から出て、家をぐるっと回って行ってくれ」（751）と、台所へのドアの前に立って自分の言葉を待っているウェデルに父親が言い、その声を聞いて娘は「ソーシェイ・ウェデル」と再びつぶやき、ウェデルにいつそう魅了されたかのように深く、静かに息を吐いて第2セクションが終わる。

この後、第3セクションは納屋の場面に移り、自分が飲むように言われたウイスキーをジュバルに運んできてやったウェデルと、土間でウェデルのうすいダンス用の上靴 (thin dancing slippers) を磨いているジュバルの会話を中心に話が展開する。ジュバルはウェデルからその密造ウイスキーを受け取ってちびちび飲む。ウェデルは、戦争は終わったんだからそんなものはもう必要ないと言って止めるジュバルのリュックサックから拳銃を取り出し、水浴をしようとする。そして井戸小屋 (well house) で浴びるから、家の人に部屋のカーテンを閉めるように言ってくれと言う。それは自分の裸を見せないという慎みからでもあったであろうが、安全のための策でもあった。拳銃を外套の下に隠したのも、母屋の部屋でのヴァッチの態度に危険を感じたからであろう。第3セクションでジュバルがウイスキーを口にすることが、結果的にウェデルの運命を大きく左右することになる。

このセクションの次に実はフォークナーが、"Mountain Victory" を送って採用された *Saturday Evening Post* 誌からの指示で削除したセクションがもともとの原稿にはあった。しかしフォークナーはこの作品を全集に収録するにあたって、削除したセクションを復活させることはなかった。このセクションで語られている主要なことは、他のセクションで語られているということなのであるが、参考のために要約しておきたい。

ウェデルが井戸小屋で水を浴びる支度をしているのをこの山小屋の姉と弟の二男ヒュール (Hule) が台所の窓からのぞいている。彼は、自分が言ったとおりウェデルには片腕しかないだろうと姉に言い、またヴァッチはウェデルを黒人だと思っているがそうではないと連れの黒人から聞いたとも言う。そこにヴァッチが入ってきて、二人に窓から離れるように命じる。ヒュールを突き飛ばし、姉 (ヴァッチにとっては妹) の方にも二度とウェデルを見るなど叱りつける。そして「どうしてあの人を私を見たいと思うんだよ。履く靴も持っていない女をどうしてあの人が見たいと思うんだよ」という姉のセリフでこのセクションは閉じられる⁽⁴⁾。

第4セクションは台所に場面が移る。ジュバルが入ってくると、台所には母親と娘がいて、母親は夕食の準備をしている。娘がジュバルに「あんたたち、どこに住んでるの」(755) とたずね、ジュバルは彼らの住処である「カウンティメゾン」(‘Countymaison’) ——前にも出てきたように正しくは「コンタルメゾン」(‘Contalmaison’) でジュバルの発音間違い——という「ラバに乗って、日の出から日の暮れまで走っても横切」(755) ることができないほど大きなブランテーションの話をする。その他、娘はウェデルに関する質問をする。ヴァッチがウェデルは黒人だと言っているがどうなのか、コンタルメゾンでは女の子はみな靴を履いているのか、ウェデルは結婚しているのか、など。最初の質問に対し、ジュバルはウェデルが黒人であることをはっきり否定する。そしてウェデルは四年間もずっと戦争に出ていたのだから、結婚などする暇はなかったとも答える。コンタルメゾンの話を聞いた娘は、さらにいっそうウェデルに魅了される。途中、ジュバルは娘にウイスキーをせびり、タンブラー一杯のウイスキーを飲み干す。また娘がジュバルの脚にまかれた毛皮らしきものを目にしたことが触れられている。

第5セクションは母屋の部屋に戻り、男三人と少年の食事の場面に移る。父親がウェデルに「あんたは黒人なのか」(758) とたずね、ウェデルはそれを否定するとともに自らの素性を語る。ウェデルが自分は南軍の少佐だったと言うと、ヴァッチは弱って立てないまま水をくれと言った南軍の少佐を冷酷なやり方で撃ち殺した話を聞かせてウェデルを挑発する。ウェデルはそれには乗らないが、そこへ母親が止めるのも振り切って娘が入ってくる。さらに父親の制止にもかかわらずまっすぐウェデルの外套がかけある椅子の所まで行って、外套の裏地が切り取られていることを確かめる。娘はジュバルの脚に巻かれた毛皮の出所を確かめ、黒人の従者に対する (そして自分にも振り向けられるかもしれない) ウェデルの愛情を確認する。

この出来事の間父親は二度娘の名前を呼ぶが、ウェデルはそれを聞きとらなかった。聞き落したことさえ気づかなかった。それは娘にまったく関心がなかったからでもあるが、娘が部屋を

出て行ったあと、自分を見つめる父親の目を見返すウェデルの目は「ものは写しても視覚を失った死者の目のよう (like those (=eyes) of the dead, in which only vision has ceased and not sight)」(762)だと描写される。つまり視力は備わっているが見ていない、起こっていることの意味を理解していないということである。何の不足もなく現実に対応しているように見えながら、ウェデルは現実を十分に把握していないのではないか。こうした疑いは、彼自身が後に自分に対して抱くことになる。最後に父親が、ウェデルの顔をじっと見つめながら「馬を連れて出て行ってくれ」(762)と言って場面は次に移る。

第6セクションは非常に短い、「家族の構造」(Skei 1999, 118)とくに娘と父親、兄との関係がこのセクションでいっそうはっきりと示されている。娘が暗い入り口の間にいて、たった今確かめたウェデルのジュバルに対するやさしさと思いやりに満ちた行為に思いをめぐらしているとき、父親が現われて皮の鞭で娘の背中を打つ。父は直前の娘のふるまいに対する罰として彼女を打ったのだが、娘は暗闇のなかでそれが父親だとわかってほっとした口調で「ヴァッチかと思った」(763)と言う。ヴァッチならもっとひどい暴力をふるっただろう。娘のウェデルに対する強い思い、あこがれにはやや唐突な感じ、不自然さを否定できないところがあったのだが、父と兄ヴァッチによるこうした暴力的な支配がはっきり示されることによって、娘の思いにより強い根柢が与えられたと言える。ちなみに父親の鞭は、娘のウェデルという男への思いを打ち、粗末な粉袋の下の娘の肉をじかに打っている(763)ように描かれていて、性的なニュアンスを強く感じさせる。

続く第7、第8セクションは、「物語を fatal resolution に近づけるだけ」(Skei 1999, 118)の役割で、そういう意味ではそれほど重要性はない。台所にはジュバルが一人残っていて、ウイスキーの入ったカメを床下から取り出してさらに飲む。それから彼は立ち上がろうとしてそのまま倒れこみ、カメをひっくり返す。ウェデルと父親とヒュールが泥酔したジュバルを見下ろした状態で、父親はウェデルに二人ともすぐ出ていくように言う。しかしウェデルが、ジュバルはこの状態では馬に乗れないと言いつつ、父親は彼に馬とジュバルをおいて一人ですぐに出ていくように言う。「たかが黒んぼじゃないか」(765)と。しかしウェデルはそれはできない、この四年間いっしょに行動してきたのだから自分はこの男を連れて帰ってやらねばならないのだと答える。父親はそれに対して「警告したぞ」(765)という言葉を残して立ち去る。ウェデルはヒュールに手伝ってもらってジュバルを納屋の二階に上げるが、「手伝ってやる」(765)と言った時のヒュールのわずかにヒステリックな調子に気づかなかった。しかしジュバルの泥酔によって結末への道筋はさらにはっきり定まった。ウェデルは出ていくように警告を受け、一人で出ていく機会も与えられたがジュバルは泥酔しており、ウェデルは彼を一人残していくことはできなかった(Skei 118)のである。そしてヒュールのわずかにヒステリックな調子に暗示されていた彼の姉の介入は当然予測できることでもあるが、それが物語の流れを乱すことはあっても結末に向かうその道筋を変えることはできない。

第9セクションでは納屋の二階でジュバルと並んで横になりながらウェデルはひとり物思いにふける。戦争に負けて故郷へ帰る途中、彼は一夜の宿として借りた納屋の二階に身を横たえながら現在の自分というものに思いを致し、人間の生というものについて考えるのである。このセクションは今述べたようにウェデルの脳裏に浮かぶ思いと突然やって来たヒュールとの会話を中心に展開する。ヒュールは突然現れて、屋根裏部屋にすぐ来てほしいという姉からの伝言をウェデルに告げるのである。

さてウェデルは酔いつぶれたジュバルをヒュールの手を借りて納屋の二階に運び上げた後、自分も並んで横になり、頭上の破れた屋根を見あげながらつぶやく。

“I was concerned. I had thought that it was exhausted; that I had lost the privilege of being

afraid. But I have not. And so I am happy. Quite happy.” (766)

彼は「それ（つまり恐怖を感じる力）は使い尽してしまったと思っていた、恐怖を覚えるという特権は失ってしまったと」。そしてそれが四年間を戦いで暮らしたことの結果であるとウェデルは思っていたのである。しかしそうではなかった。自分は恐怖を感じる力をなくしてしまったわけではなかったのだ。だから「うれしい。……本当に幸せだ」、そうウェデルは感じている。

語り手はこの場面に至るまでウェデルの内面にはほとんど立ち入ることがなかった。表面的に見る限り、ヴァッチの脅しもウェデルにはまったく応えていないように思えた。しかし引用したウェデルのつぶやきから、彼が命の危険を感じていたのは確かである。そしてそのこと（自分の生命が脅かされていること）に恐怖を感じたということである。上の引用の直前に彼は“*If I leave the mountains,*”（「もし生きてこの山を出られたら」[Towner and Carothers 406]）と口にしてしている。

ウェデルの、この恐怖を感じる力を使い尽くしてしまったのではないかという不安は、言いかえれば四年間も戦闘に従事してきた自分が戦争の終わった後の現実に対応できるだろうかという不安であろう。そうした感触について彼自身が語っている箇所がある。先に述べたように、ウェデルは同じこのセクションでヒュールから屋根裏部屋に来てほしいという姉の伝言を告げられる。拒否するウェデルにヒュールが「ヴァッチが怖いのか」と聞くと、ウェデルは「ヴァッチじゃない。ただ怖いんだ」と答える。

“Not Vatch. I’m just afraid. I think my luck has given out. I know that it has lasted too long; I am afraid that I shall find that I have forgot how to be afraid. So I can’t risk it. I can’t risk finding that I have lost touch with truth. Not like Jubal here. He believes that I still belong to him; …He does not need to bother about truth, you see.” (769)

ウェデルは「恐怖の感じ方を忘れてしまっていたことに気づくことになるんじゃないかとこわいんだ。だからそんな危ないことをやってみることはできない」と言う。つまりこの場合は娘の誘いに乗って屋根裏部屋を訪れるということだが、軽々しくそんなことをして、あとで自分は恐怖の感じ方を忘れていたのだと気づくようなことにはなりたくない。自分がしていることの意味を理解していなかったのだと気づくようなことにはなりたくないと言っているのである。彼には自分が「真実 (truth) との接触を失ってしまった」、現実をしっかり触れることができなくなっているのではないかという不安、感触があったと思える。「恐怖の感じ方を忘れている」というのはそういう意味であろう。

自分のうちにまだ恐怖を感じる力が残っていることを発見したウェデルは、「うれしい……、とても幸せだ」とつぶやいた後、凍るように寒い暗闇の中に横たわりながら故郷を思う。そして人間の生というものに思いを致す。

Contalmaison. Our lives are summed up in sounds and made significant. Victory. Defeat. Peace. Home. That’s why we must do so much to invent meanings for the sounds, so damned much. Especially if you are unfortunate to be victorious: so damned much. It’s nice to be whipped; quiet to be whipped. To be whipped and to lie under a broken roof, thinking of home.” (765)

われわれの生というものは、音（言葉）によって要約され意味づけられる。たとえば「勝利。敗北。平和。故郷」というように。しかしこうした音（言葉）は空虚なものだ。その空虚を埋めて意味をつくりだすためには、われわれは実に多くのことをしなければならない。とりわけ勝者になるような不運に出会ったりするとそうである。ウェデルはそのように考える。たとえばヴァッ

チがいい例である。彼は南北戦争に北軍の兵士として参加し勝利を取めた。しかしその勝利がヴァッチにもたらしたのと言え、夜中に悩まされる戦闘の悪夢（「弾も入ってねえ鉄砲だけで、わめきながら、トモロコシ畑のかかしのようになんで走って来やがる……」(765)）と、そうした悪夢をもたらす仇敵に対する激しい憎しみと、勝利したにも関わらず依然として変わることのない極貧の生活である。ヴァッチのウェデルに対する憎悪は、それらのものが一体となり、その上さらに人種偏見にもとづく憎しみと階級の差がもたらすそれが加わっていっそう激しいものになっていると言える。そして虚ろに響く「勝利」という言葉に内実を与えるためにヴァッチができることは、その憎悪をウェデルに（そしておそらく家族に）ぶつけることぐらいしかない。あるいはそんなことまでしなければならないのである。

一方、徹底的に打ち負かされるのはいいことだ。また心穏やかなことである。「敗北」という言葉にそれ以上意味をつくりだす必要はない。ウェデルはすでに戦って敗れたのであり、片腕を失った。敗れた人間は穴のあいた屋根の下に横たわって故郷に思いを馳せればよいのである。戦いの後、ウェデルはここに来て初めて心の安らぎを得たようにみえる。しかしひとときの安らぎは安らぎとして、ウェデルも言葉の内実をつくりだす努力をすぐにも始めなければならない。

ヒュールは姉からの伝言をもって突然納屋の二階に現われ、彼と姉の寝床のある屋根裏部屋の窓にかかっている梯子があることを教える。彼女はこの山小屋の窒息するような状況から何とか抜け出そうとウェデルを誘惑するのだが、ウェデルは「おれは、ただ故郷へ帰りたいだけなんだ」(768)と言ってこの誘いを断る。ヒュールは自分もいっしょに連れて行ってほしいと考えており、二人の間で押し問答が続くが、そこに父親が現われ、夜明けまでに出ていくように告げて帰っていく(768-70)。この後ヒュールも「こいつ（ジュバル）はここにおいて出て行けよ」(771)と言うが、ウェデルは「それはだめだ」とはねつけ、その後には次の文章が続く。

The boy squatted above the snoring Negro. He was not looking at Weddel, yet there was between them, quiet and soundless, the copse, the sharp dry report, the abrupt wild thunder of upreared horse, the wisping smoke. (771)

“the copse...the wisping smoke”の部分は、最後ウェデルが待ち伏せしていたヴァッチと父親に射ち殺されて地面に横たわっている場面の描写(776)と重なる。この時点でウェデルとジュバルの運命が決定的に定まったということが、この場合はヒュールの視点を通して(?) 予示されているということであろう。この後さらにヒュールは谷へ下る近道を教えてやるからジュバルをおいて出ていくようにウェデルに言うが、ウェデルはジュバルを故郷に連れて帰ってやらなければならないと言ってこの申し出も断る。以上が第9、10セクションの梗概である。

最終の第11セクションにおいて、翌朝早く山小屋を出発したウェデルとジュバルは、途中ヴァッチと父親の待ち伏せに会い、二人とも命を落とす。ジュバルの死については直接に書かれてはいないが、それが確実なものであることが暗示されている(777)。ところでこの待ち伏せに関して、ヒュールがどのように関わったのかについては研究者の間で意見が異なる(Jones 517)。ヒュールは既述のとおり待ち伏せの前夜ウェデルを訪れ、姉と自分をいっしょにミシシッピに連れて帰ってほしいと訴えていた。それははっきり断られたのだが、翌日ウェデルとジュバルの行く手に現われた彼はあきらめることなく同じ訴えを繰り返す。このように自分たちの願望をしつこく訴える彼が最初からウェデルをすんなり父親と兄ヴァッチの手に委ねてしまうつもりだったとは考えられない。ヒュールが父親と兄が待ち伏せしている付近に姿を現したという事実は、彼が少なくとも待ち伏せの計画を知っていることを示しているが、ではどのように彼はこのたくらみに関わったのだろうか。

結論から先に言えば、ヒュールは待ち伏せの計画に最初から加担していたと思われる。ウェー

ルたちの行く手に現われて入るべき小道のある方向を教え、さらにウェデルの乗る馬 (sorrel= 栗毛の馬) の手綱をとるヒュールにウェデルは礼を言ってもう道はわかるから帰ってくれと言うが、ヒュールは「あいつら (父と兄) もこの道を知ってるぜ」(773) とウェデルの馬の手綱をとる手を離さない。やがてその道らしき小道に入るのだが、ヒュールは常に自分が前を行きジュバルの乗るサラブレッドを後方に留めようとする。やがて道が広がってサラブレッドが進み出て横に並んで来たときにもヒュールは「後ろに下がってろ、本当に」とジュバルに向かってきつく言い放つ。そこで何かおかしいと感じたウェデルが「どうして後ろにいくちゃいけないんだ？」(775) とたずねる。

....He (=Weddel) said aloud: "Why must he keep back?"

The boy (=Hule) looked at Weddel; he stopped, pulling the sorrel up. "We'd work," he said. "We wouldn't shame you."

Weddel's face was now as sober as the boy's. They looked at one another. "Do you think we have guessed wrong? ..." (775)

引用文のとおり、ウェデルの問いにヒュールは答えず、自分たちは働かしウェデルを恥ずかしめるようなことはしないから連れて行ってくれと繰り返す。それを無視してウェデルが発する「君はおれたちの考えが間違っていたと思うのかね」という引用最後の言葉は、おそらく今たどっている道は (安全な道ではなく) 実は父親と兄が待ち伏せしている道ではないのかという意味であろう。その言葉を受けてヒュールが「おれの細工だとは思わねえだろうな？絶対に思わねえだろうな」("You won't think hit is me? You swear hit?") (775) と言っていること、またしばらく進んでウェデルが「こちらあたりか？」("You mean, it could be here?") (775) と父親と兄が襲ってくる場所をたずねている (のであろう) ことを考え合わせれば、ヒュールがウェデルたちを父と兄が待ち伏せしている道に誘い込んだことは明らかだろう。ただその前にヒュールの願いをウェデルがきっぱり断った時、ヒュールは「それじゃ行こう。急がないとだめだ」(774) と言っている。この言葉はシェイが言うようにやはりウェデルを助けようとするヒュールの気持ちを表している。ととるべきであり、彼はおそらく父と兄をだましてそうするつもりだった (Skei 1990, 120) とみることができる。またヒュールが後でウェデルに明かすように、彼はウェデルが「いい方の馬 (サラブレッド) に乗っている」と父と兄に告げていた (776) のであって、サラブレッドに乗るジュバルを後方に留めようとしたこともまずジュバルを狙わせようというヒュールの意図だったと考えられる。そして最後ヒュールはサラブレッドに飛び乗り、ジュバルを馬から落として「道から出るんだ」(776) と危険なその道を出るようにウェデルに向かって叫びながら父と兄が待ち伏せしている方に向かって突進していく。ヒュールは最後はおそらく罪の意識から自分を犠牲にしてウェデルを助けようとした (Skei 1999, 120), あるいはまず自分が犠牲になろうとしたのだろう。結局ヒュールは父と兄の計画に加わっていたが、その中でウェデルに翻意を促すなど何とか (ウェデルも含めて) 自分たちの幸福への道を探る一方で、それがかなわずともウェデルを助けたいと考えてもいた (梅垣 69) のだと思われる。しかしそのどちらもがおそらくかなわない状況の中でヒュールの行為はほとんど自暴自棄の自殺であったと言ってよいだろう。

いずれにしてもウェデルとヴァッチが最初に出会った時からこうした劇的な結末が予定されていた。作者はすでに第2セクションにおいて語り手に、母屋の居間から台所にいる娘の耳に聞こえてくるウェデルとヴァッチの二人の声は「まだ高まってはいるが、それでも永遠に和解はなく、すでに破局の運命を背負っていた (not yet raised yet forever irreconcilable and already doomed)」と語らせ、その二人は「一人は盲目の犠牲者であり、今一人は盲目の死刑執行者なのだ (the one blind victim, the other blind executioner)」(750) と明言させている。ヴァッチの旧南軍兵士に対

する憎悪は前にも述べたとおり、ウェデルに対する人種偏見、生活レベルの格差などに発する憎悪、妹が（黒人の血が流れていると思われる）ウェデルに強く惹かれたといった事情によってその激しさを増す。その一方でウェデルは、自分が助かるために泥酔して馬に乗れないジュバルをおいて出ていくというようなことのできない人間だった。そこにウェデルとヴァッチの反目の行方が定まったと言うことができる。（しかし実を言えば、最後、ヒュールがウェデルを父親と兄の待ち伏せする小道に誘い込んでから、ウェデルがその待ち伏せの方へ向かって馬を駆り、その後をヒュールが追いかけて二人とも狙撃され殺されるまであたりの各々の振る舞いには理解しにくい点がある。たとえば今まさに述べたようにウェデルは父親とヴァッチの潜んでいるであろう方向へ突っ込んで行くが、なぜそうしなければならないのか。またヒュールはジュバルを常に後方に留めようとするが、それはジュバルを先に狙わせようとするためなのか。ジュバルを先に標的にするつもりなら前を歩かせるのが順当ではないか。こうした分かりにくさが、結末を目前に控えた読者の心に軽い苛立ちを生む。そしてそれが悲劇的結末に向かって突き進んでいくこの物語の流れを澁ませてしまう可能性も実は否定できない。）

Dabney はウェデルが黒人と見まちがわれることの「攪乱的な可能性（subversive possibilities）」（Dabney 36）について言及している。ウェデルがフランス人の血を引くチョクトー族の族長の息子であるという設定はやや不自然な感じがしなくもない⁽⁵⁾が、実は大きな可能性を秘めた設定であったことがふり返ってみてわかる。実際に黒人の血を引く人間であれば、たとえ旧南軍の少佐といえども白人が住む山小屋に一夜の宿を乞うというようなことはおそらくなかったのではなかろうか。フランス人の血、族長の息子という設定はウェデルに、しばしば‘arrogant’とも形容される高い誇りを与え、それが醸し出す雰囲気、態度が山小屋の娘を魅了する大きな要因の一つにもなっていると言える。黒人に見まちがわれる高貴なインディアンという存在には危険な可能性が秘められていたのである。

注

- (1) 順に、I. THE COUNTRY II. THE VILLAGE III. THE WILDERNESS IV. THE WASTELAND V. THE MIDDLE GROUND VI. BEYOND の六つ。カウリーの助言はフォークナーによって受け入れられることはなく、このままの配列で出版されることになった。
- (2) この書は‘Patterns’, ‘Point of View’, ‘Form’ といったトピックごとに論じられている。
- (3) William Faulkner, “Mountain Victory”, *Collected Stories of William Faulkner*. (New York: Random House, 1950), 745. テキストからの引用はこの版による。引用ページはそれぞれの文末に示した。日本語訳は瀧川元男訳『フォークナー全集 10 医師マーティノ、他』（東京：富山房、1971）を参考にした。
- (4) James B. Meriwether により “An Unpublished Episode from ‘A Mountain Victory’” として *Mississippi Quarterly* 32 (1979) に掲載された (481-83)。
- (5) ウェデルの父親 Francis Weddel のモデルとなった Greenwood LeFlore というフランス人の血を引くチョクトー族の族長が実際に存在し、Mississippi 州に広大な綿花プランテーションを所有していた。だから不自然と言うのはあたらなかもしれないのだが。Cf. Lewis M. Dabney, *The Indians of Yoknapatawpha* (Baton Rouge: Louisiana State U. P., 1974) 35-36. なおウェデルの父親は “Lo!” (1934) に主要人物として登場する。

引用参考文献

- Bradford, M. E. “A Late Encounter: Faulkner’s ‘Mountain Victory.’” *Mississippi Quarterly* 40 (1987): 373-81.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*. New Haven: Yale University Press, 1978.
- Carothers, James B. “The Myriad Heart: The Evolution of the Faulkner Hero.” “A Cosmos My Own”: *Faulkner and Yoknapatawpha* 1980. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: U. P. of Mississippi, 1981, 252-83.
- . “Faulkner’s Short Stories: ‘And Now What to Do.’” *New Directions in Faulkner Studies: Faulkner and Yoknapatawpha* 1983. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: U. P. of Mississippi, 1984, 202-27.

- . “I Ain’t a Soldier Now: Faulkner’s World War II Veterans.” *Faulkner Journal* 2 (1987): 67-74.
- Cowley, Malcolm. *The Faulkner-Cowley File: Letters and Memories 1944-1962*. Penguin Books, 1978.
- Dabney, Lewis M. *The Indians of Yoknapatawpha*. Baton Rouge: Louisiana State U. P., 1974.
- Faulkner, William. “Mountain Victory”, *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Random House, 1950. 745-77.
- Ferguson, James. *Faulkner’s Short Fiction*. Knoxville: University of Texas Press, 1991.
- Howe, Irving. *William Faulkner: A Critical Study*. 3rd ed. Chicago: University of Chicago Press, 1975.
- Johnson, Bradley A. “Constructing the Female Gaze in Faulkner’s “Mountain Victory””. *The Faulkner Journal* XVI: 3 (2001): 65-80.
- Karl, Frederic. *William Faulkner: American Writer*. New York: Weidenfeld and Nicolson, 1989.
- Kinney, Arthur F. “Faulkner’s Other Others.” *Faulkner at 100: Retrospect and Prospect: Faulkner and Yoknapatawpha, 1997*. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: U. P. of Mississippi, 2000, 195-203.
- Meriwether, James B. “Faulkner’s Correspondence with *The Saturday Evening Post*.” *Mississippi Quarterly* 30 (1977): 461-75.
- . “Unpublished Episode from ‘A Mountain Victory.’” *Mississippi Quarterly* 32 (1979): 481-83.
- Skei, Hans H. *William Faulkner: The Short Story Career*. Oslo, Norway: Universitetsforlaget, 1981.
- . *Reading William Faulkner’s Best Short Stories*. Columbia: South Carolina U. P., 1999.
- Towner, M. Teresa and James B. Carothers. *Reading Faulkner: Collected Stories*. Jackson: U.P. of Mississippi, 2006.
- Vashchenko, Alexandere. “Woman and the Making of the New World: Faulkner’s Short Stories.” *Faulkner and Women: Faulkner and Yoknapatawpha, 1985*. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie, Jackson: U. P. of Mississippi, 1986, 205-19.
- Volpe, Edmond L. *A Reader’s Guide to William Faulkner: The Short Stories*. Syracuse: Syracuse U.P., 2004.
- 梅垣 昌子 「“Mountain Victory” ——失われた銃声」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』29 (2005) : 49-73.
- 小山 敏夫 『ウィリアム・フォークナーの短篇の世界』京都：山口書店, 1988.
- 嶋 忠正 「『山の勝利』における敗者の栄光への寓話 (その一)」『大阪明浄女子短期大学紀要』11 (1997) : 125-43.
- . 「『山の勝利』における敗者の栄光への寓話 (その二)」『大阪明浄女子短期大学紀要』12 (1998) : 83-107.
- 花岡 秀 『ウィリアム・フォークナー短篇集——空間構造をめぐって——』京都：山口書店, 1994.
- 藤澤 良行 「Fathers and Sons: ウィリアム・フォークナーの『山の勝利』研究」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』36 (2000) : 101-20.
- 森岡 隆 「短篇『山の勝利』における『山』の要素の再検討」『和歌山工業高等専門学校研究紀要』37 (2002) : 85-89.